

## 東アジアを焦点に過労死防止学会第4回大会が開かれる

森岡孝二（過労死学会事務局長、関西大学名誉教授）

過労死防止学会第4回大会は、2018年6月2日（土）～3日（日）、札幌市の北海学園大学で開催された。

過労死110番が始まったころは、過労死は日本に特有の社会問題とされていた。しかし、今日では世界的な問題となり、東アジア、とくに韓国と中国では深刻な状況を呈するにいたっている。そこで今大会は、初日の午後に下記の3人を報告者として、「日中韓・過労死防止国際シンポジウム」を行った。

### 国際シンポジウム

中国：楊河清教授（「適度労働学会会長」）「中国過労問題研究の現状」

韓国：ジョン・ビョンウク弁護士（過労死予防センター事務局長）「韓国で始まった過労死防止運動」

日本：松丸正弁護士（過労死弁護団代表幹事）「過労死110番運動の30年間」

中国では2000年以降、過重労働と過労死の研究が広がり、2012年には「中国適度労働研究センター」（現在は中国適度労働学会）が設立された。韓国では昨年9月、多数の労働・市民団体が集まって「過労死OUT共同対策委員会」が結成され、「過労死予防センター」が発足した。また文在寅大統領のもとで、昨年、勤労基準法が改正され、今年7月よりこれまでの「週68時間勤務制」から「週52時間勤務制度」に順次移行することになっている。

2日目午前には6つの分科会が置かれ、それぞれ建設、医療、教員、裁量労働制、ハラスメント、韓国と中国の過労死問題について、それぞれ報告と討論があった。

### 第1分科会 建設関連産業の就業実態と過労死

松浦洋一郎「建設労働者の社会保険未加入を端緒とする不安定就業の考察」

中澤 誠「東京五輪と建設業界」

石川啓雅「専門的技術的職種の労働時間—“働き方改革”の行方を考える」

### 第2分科会 医療現場の長時間労働と働き方

中原のり子「医師の過労死、これからの展望」

大利・杉山・佐藤・松井「PNS（Partnership Nursing System）の時間外労働と疲労」

田村 修・吉岡愛未「新人看護師サポートプログラム9年間のまとめ」

### 第3分科会 教員の「働き方改革」の取り組みと課題

工藤祥子「公務災害制度に掛かる諸問題及び教師の働き方の現状と問題点」(工藤会員の故障で報告は中野淑子会員が交替した)

尾崎正典「災害発生から10年目に出された東京高裁、最高裁の判決文における内容(副題省略)

大西昭和「教職員の職場環境変革の課題と戦略～娘の生死との葛藤から～」

### 第4分科会 裁量労働制と長時間労働の実態

今野晴貴「裁量労働制における労務管理の実態分析」(副題省略)

三家本里美「企画業務型裁量労働制の導入・運用をめぐる労使関係」

塩見卓也「裁量労働制の制度上の問題点と論点」

青木耕太郎「裁量労働制へのユニオンの取り組み」

### 第5分科会 職場のハラスメントと過労の実態

奥田雅治「市バス運転手の焼身自殺と公務災害認定」

前田和美・西垣迪世「神戸製菓会社20歳青年パワハラ自死事件」

色部 祐「自験例を通じて脳・心臓疾患および精神障害労災認定基準改定の検討」

坂口真澄「増加する客室乗務員の在職死亡、過労の実態と提言」

### 第6分科会 韓国・中国の過重労働と過労死(報告者でない中国の共同研究者名は省略)

姜守丕(ガン・スドル)「韓国における過労死問題の社会経済的背景」

張智勇「幻のリラックス、女性大学教員の効果的時間配分政策」(副題省略)

卿涛・徐程「相対的搾取という視覚からの過度労働と従業員の健康(副題省略)

李中斌「過度労働従業員に対する正確な管理および評価規準研究」

黄河「リーン生産方式における従業員の疲労状況調査及び予防対策研究」

過労死防止法の制定以来、厚生労働省は、調査研究、啓発、相談体制の整備、民間団体の支援などに取り組んできた。しかし、依然として過労死・過労自殺が続発する状況が続いている。目下、政府は「働き方改革」関連法案の成立を急いでいるが、それは、大企業の中核的正社員を対象に労働時間の規制を外すとともに、1ヶ月概ね100時間までの時間外労働を適法とする点で、過労死防止の流れに逆行するという批判を招いている。

そこで、2日目午後は共通論題「過労死問題からみた“働き方改革”の諸問題」をテーマに以下の3報告が行われ、会場を交えて質疑応答があった。

### 共通論題

上西充子(法政大学教授)「労働時間規制の強化と緩和、抱き合わせがもたらす弊害」

濱口桂一郎(労働政策研究、研修機構労働政策研究所長)「EUの労働時間法制とその含意」

森岡孝二(関西大学名誉教授)「三六協定による労働時間規制の解除と時間外労働」

今回の大会には中国から 12 名、韓国から 9 名の参加があった。全体の参加者数は初日と 2 日目の重複を除き 187 名であった。2 日間のいずれのセッションでも、活発な報告と討論が行われ、大会は成功裏に終わった。